

見返り阿弥陀如来像

去る一月十二日、故三島由紀夫君の七七日の法要が、大森の自宅で、ごく内輪に営まれた。御両親の住居は、同じ屋敷内ではあるが、日本建ての別棟になっていた。読経がはじまるまでに、まだ一時間ばかり間があったので、母屋から庭伝いにそちらへ挨拶にうかがった。その部屋の床の間にも、故人の遺影がまつられ、その前に焼香のしつらえもしてあった。私は広島から携えていった織部の鶴首花瓶に、大森駅前通りの花屋で求めた白水仙を活けてもらった。花はやや長目に活けてあったが、お手伝いさんがそれを遺影の前に供えようとすると、母君がここへと指して、その向かって左側にすえるよう命じられた。花の位置が写真よりも高くなるので、私は恐縮し、かつ不審に思ったが、ふと、その左上を見ると別の台を設けて、一面の仏像の写真が、枠に入れて安置してあるのが目にとまった。それは見返り阿弥陀如来像であった。

母君の話によると、仏像写真集を開いて見ていると、京都禅林寺の本尊のこの像が目についた

ので、人に頼んで、雪の降る日にわざわざ撮りに行ってもらったのだ、ということである。息子の、あるいは憤りにゆがんだままであるかも知れない表情を、この仏の慈悲の眼差しでやわらげてもらおうつもりで、……と付け加えられた。そういわれると、ちょうど、見返り阿弥陀如来の視線が、遺影の顔にそそぐような位置に、それはあった。さらに、その視線がなぞって通りすぎるように、さっき持ってきた水仙が供えられていた。「先生にいただいた花だから、側に近くおいてやってちょうだい」と、何気なくいわれた言葉を思い合わせ、思わずはっとし、ついで熱いものがこみあげてくるのをおぼえた。

死の翌日、密葬のための読経がすみ、白布に蔽われた柩が、応接間からテラスへ運び出されようとしたとき、「待って」といって、追いつがるように柩に手をふれて、「公威こういさんさよなら」と低い声でいいかけられた母君の姿が、まぶたに蘇った。

私は、三島君の死の意味を、一番よく知っておられるのは、母君だと思う。死の報に接して、急遽上京し、お会いして一言二言交わしているうちに、そのことを私は直観した。

(四六・六)